

## 年頭のごあいさつ ～気候変動対策と原木安定供給～

林産試験場長 八坂通泰

新年明けましておめでとうございます。2020年を迎え、謹んで新春のご挨拶を申し上げます。

昨年の11月に、気候変動についての市民向けセミナーが旭川市大雪クリスタルホールで開催され、講師の一人として参加しました。私からは、気候変動が森林・林業に与える影響やその対策についてカラマツを中心にお話ししました。私以外の講師は、札幌管区気象台地球温暖化情報官の上澤さん、旭山動物園園長の板東さんでした。お二人からは、21世紀末には北海道の平均気温が約5°C上昇し、現在の新潟県と同程度になる話題や、気温上昇により北米でハイイログマの生活圏が北上し、ホッキョクグマとの雑種個体が出現しているという話題などが紹介され、私も聴衆の一人として興味深く拝聴しました。



林業・木材産業における気候変動対策では、二酸化炭素を森林において吸収し、建築物として固定する、あるいは化石燃料代替として木材をエネルギー利用するなどの緩和策が大きな柱として進められてきました。一方で、適応策すなわち温暖化の影響を予測し、森林被害を低減するための対策についても、近年の頻発する自然災害を受け早急な対応が求められています。昨年も、台風15号、19号など強力な台風が関東・東北地方を中心に甚大な被害を引き起こしました。特に、台風19号は関東地方において最大瞬間風速50m以上を記録し、千葉県で広範囲にわたり発生した森林の風倒害は、送電網を寸断し長期広域停電をもたらしました。

気候変動が森林被害に及ぼす影響は気象害だけではないと考えられています。2016年には、従来の被害規模を大幅に上回るキクイムシ被害がカラマツの主産地である道東地方で発生しました。今後も、人工林の高齢・大径化や温暖化による昆虫活動の変化などに伴い、北海道の森林において経験のない規模の生物害が発生する恐れがあります。欧州でも、虫害や風害の処理木が原木供給の過半を占め、被害処理による原木供給過剰により価格暴落を引き起こした例がありました。北米では、キクイムシの仲間であるマウンテンパインビートルによる被害木の処理のため伐採量が増加していましたが、昨年からは被害木処理が収束し伐採量が減少する影響で、OSBなどの工場が閉鎖するという事態も起きています。

森林被害は私たちの日常生活や林業活動に大きな影響をもたらす、被害面積は数千から数万ヘクタールにもなることも珍しくなく、例年の伐採面積の数分分に及ぶこともあります。さらに、被害木処理は通常の伐出作業よりも危険な作業であり、様々な二次被害を防ぐために可能な限り迅速な対応も求められます。最近の道内の原木不足は、災害処理へ人員が割かれたことが要因の一つと考え、今後は、原木安定供給において森林被害の発生をある程度見込む必要があるかもしれません。さらには、森林被害対策をより重視した森づくりも検討する必要があるでしょう。

近年の人工林造成においては、気候変動における気象害や生物害の対策として評価できる取り組みがあります。例えば、人工林の植栽密度は低下しており、比較的風害に強い林に仕立てやすい施業に変わっています。また、様々な生物害に抵抗性が高いグイマツ雑種F<sub>1</sub>（グイマツとカラマツの交配種）を増産するための採種園造成も進められています。これらの取り組みは、人工林の生産性向上のために始められましたが、生産性向上の取り組みと気候変動対策の方向性が一致する場合があります。次世代人工林の造成が始まりつつある現在は、生産性向上や森林被害低減などの総合的対策の検討が必要な時代になっています。

年始早々やや心配な話題で始まり恐縮ではありますが、今年は東京オリンピック・パラリンピックで、木材を利用した様々な施設が世界中に発信され大きく注目されるはずで、温暖化の緩和策となる都市の木質化も林産試験場の重要課題です。また、今年は林産試験場設立70周年と北海道立北の森づくり専門学院開校という記念すべき年にもなります。今年も林産試験場にご指導、ご鞭撻頂くことをお願い申し上げます。新年のご挨拶とさせていただきます。